

Gikyohan Times

No.0009

GIKYOHAN TIMES

2021 年 2 月発行

ICT と「性教育」

当社は岐阜県の全小中高校に紙の教科書を供給し続けて 100 年以上の会社です。当社は岐阜県の全小中学校に「SCHOOL e-LIBRARY」進呈させて頂きました。配送も終了しました。経産省の見守り事業でもありますので是非ご使用して頂くようお願い致します。岐阜県の子どもたちに新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。尚、商品の詳細情報は当社 HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認できます。尚、岐阜県教販通信のバックナンバーも HP に記載しております。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

わたしは、東京で 2009 年から「カタリバ大学」という学びの場を主宰している。

「大学」を名乗ってはいるが、もちろん正規の学校ではなく、厳密には社会教育に位置づけられる学びの場であり、中学生くらいから高齢者まで誰でも自由に参加できる。月に 1 度のペースで、その都度テーマを設定して告知し、そのテーマに関心のあ

る人たちが集まって、専門家ゲストの話を聞き、参加者同士議論するのだ。

コロナ禍で、去年からオンライン開催になり、地方だけでなく外国からの参加者もあるなど、かえって広がりを見せている。前回も、ゲストがスウェーデンから(!)講演する形になった。テーマは「話したいけど話せない『性』のこと」。ゲストは、日本における避妊アクセスの改善や、リプロダクティブヘルス・ライツ(性と生殖に関する健康と権利)の問題に取り組んでいる「#なんでないの プロジェクト」の代表・福田和子さん。留学先のスウェーデンから、世界の状況、日本の状況を語っていただいた。その際、大きな話題となったのは、日本の性教育についてだった。参加者には、教師が多いだけでなく、高校生や大学生もたくさんいた。性教育をやる側の教師も、受けた側の高校生、大学生も、全員が誰も満足していないのが印象的だった。教師は、一生懸命教育方法を工夫し、生徒に伝えようとする。にもかかわらず、生徒の側には不満が出る。これは、一般教科など他の教育とは全く違った反応だ。

それは、性に関する知識、情報の必要性が、ひとりひとり異なるからだ。ほとんどの場合、男子と女子に分けて行っているものの、LGBT などセクシャル・マイノリティの存在を考えれば、それも十分とは言えない。また、個々が置かれたさまざまなシチュエーションを前提に対応しないと意味がない。いくら素晴らしい教育を用意したつもりになっても、一律授業では学習者の多様な学習ニーズに応えきれないのである。

すなわち、性に関する学習には、最近唱えられている「個別最適」が最も強く求められる。だとすれば、子どもたちの学習ニーズに適切に応えるためには、一斉授業の性教育は、あまり効果がなさそうだ。このような場合、タブレットなどを使い、生徒各自が自分の必要とする知識、情報にアクセスするやり方を考えてみてはどうだろうか。

ネットで怪しげな情報にぶつかるのではなく、都道府県レベル、あるいは国レベルで、あらゆる場合について、きちんと用意されたデータベースを整備しておくのである。生徒は、そこで適切な知識、情報を得た上で、さらに必要があれば家庭や学校で、親でも教師でも話しやすい人に相談すればいい。親にも教師にも言えないケースも多いだろうから、そのときは、専門家への電話やメールによる匿名相談を可能にしておく。

ネット、電話、メールは、時として子どもたちに害を与えてしまう。特に、性に関する被害には十分注意する必要がある。だが、性に関する学習のためのツールとして周到に準備しておきさえすれば、学ぶ有力な手段として大きな役割を果たしてくれるだろう。

教育の ICT 化が声高に叫ばれている。そのこと自体は賛成だが、なんでもかんでもそうすればいいわけではない。どういう場面で効果を発揮するのか、よく考えてうまく使いたいものだ。